

《特別講演》

Madame Renée Nantet, Madame Violaine Bonzon

「ポール・クロードルとカミーユ・クロードルを語る」

吉 田 城

解説

2003年3月14日、フランスの詩人・劇作家にして外交官ポール・クロードル（1868-1955）の末娘にあたるルネ・ナンテ夫人Mme Renée Nantetと、御令孫ヴィオレーヌ・ボンゾン夫人Mme Violaine Bonzonが京都大学にお見えになり、フランス文学研究室において懇話会が開かれた。お二人は、大改修の完成した関西日仏学館の記念レセプション（3月15日）に出席し、ポール・クロードルの姉で彫刻家のカミーユ・クロードルが製作したポールの胸像の除幕式に立ち会うために、京都を訪れたのであった。

関西日仏学館はそもそも1927年、当時駐日フランス大使であったポール・クロードルと、貴族院議員稲畑勝太郎氏によって、日本とフランスの学術、文化交流の発展のために蹴上にある九条山（現在ここにはフランスの芸術家たちの滞在するヴィラ九条山が建っている）に設立され、のち1936年に現在の位置に移ったものである。ナンテ夫人は80歳をゆうに越えておられるにもかかわらず、矍鑠として能弁な女性であった。ユーモアを交えて語る夫人の顔かたちは、ご尊父の生き写しのような印象を与えた。またボンゾン夫人はポールの長男ピエール・クロードルの令嬢でカミーユ・クロードルの研究者でもあり、今回の懇話会で中心となって貴重なお話をしてくださった。

京都大学文学研究科の21世紀COEプログラムの研究班のなかで、とくに異文化接触・比較文化論を調査研究している第35研究班内のフランス研究グループ（主たる研究員は吉田城、永盛克也）にとって、日本文化に大きな関心を寄せ、エッセー集『朝日の中の黒い鳥』*L'Oiseau noir dans le Soleil levant*（1927）を執筆したポール・クロードルのご親族をお招きして、ポールとカミーユ・クロードルについてお話していただくという機会を得たことは、まことにありがたいことであった。この会の設定にあたって、鳥取大学教授でクロードル研究家の門田真知子さんにたいへんお世話になった。この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。

（吉田城 記）

ボンゾン夫人「ポール・クロードルとカミーユ・クロードルを語る」

「なあ、私の小さなポール、私は60歳を越えていたのだよ。」文芸愛好家のアンリ・モンドール¹⁾が彼の著作『より秘められたクロードル』*Claudel, plus intime*のなかで伝えているポール・クロードルの言葉です。これはポール・クロードルが、ある女友達の家での会話の際、姉カミーユへの最後の訪問のことをポール・ヴァレリーに語っているのです。

1951年にロダン美術館で開かれたカミーユ・クロードル展覧会のカタログ序文は、最初の一語をのぞいた「私の小さなポール」という同じ呼びかけで始まっています。そしてテキストの続きはもちろん皆さまもご存じのことでしょう。「私は姉のことを、あのすばらしい若い娘のことを思い出します、美貌と才気の勝ち誇った輝きに包まれ、私の青春の日々に対してしばしば残酷な支配力をふるったあの人のことを。」

ポール・クロードルはこの数行のうちに姉カミーユという女性の全人生を描いたのです。その彼女の存在や不在はポールの全生涯とともにあったのです。この文章は彼の死の4年前に書かれたものです。

ポールの人生は長く、充実していました——作家、詩人、いくつもの要職を歴任した外交官、大家族の父親でもありました。カミーユの人生もまた長いものですが、49歳のときに悲劇的に絶ち切られてしまいます。しかも、カミーユの幽閉生活に先立つ年月——その間彼女は、靈感が枯渴したためにもはや自分には達成できなくなったすべてのものを破壊してしまいました——を勘定に入れるなら、さらに以前に絶ち切られたことになります。

ポールは本職をもって生活した45年のあいだ、出来事や創作活動で満たされた流謫（外国暮らし）を経験しました。カミーユもまた流謫を経験しましたが、それは創造することを——そして他の人々とともに生活することを——永久にやめた女性の生活でした。姉と弟はこの流謫という点でけっして離れることがなかったのです。

幼年期—思春期—青年時代

ポールは若かりし日々姉から受けた支配力のことをしばしば語っています。カミーユはかなり若い頃より彫刻を始めました。そして家族全員を自分に仕えさせました。カミーユの同時代人によってかつて書かれたもっとも完璧な記事である、友人で賛美者でもあったマチアス・モラルの文章をここに引用しましょう。「カミーユの芸術が急速に侵入したその実家は、やがてアトリエの付属物にほかならなくなった。そこではあらゆる時代の、あらゆる民衆の英雄たちの悲劇的な、あるいはしかめ面をしている無数の顔が土となり、石となり、木となって生き続けているのだ。文法、算術、歴史の二つの授業の合間で、このアトリエはあらゆる活動の中心となっている。クロードル嬢は、妹や弟ポール・クロードルに支えられて、そこで女王のように君臨する。また、もし弟や妹が割り当てられた仕事から逃げ出そうとするならば、カミーユは彼らをその逃げ道で待ち伏せし、無理やりにでもアトリエに連れ戻すのだ。」

ポールが生涯の最後にジャーナリストのジャン・アンルーシュの質問を受けたときに述べた言

葉を、『即興の回想録』 *Mémoires improvisés* のなかから今度は取り上げましょう。「そして、そのときに家族のなかに大異変が生じたのです。私の姉は、自分に偉大な芸術家になるべき天命があると考えていて（不幸にもそれは真実のことでした）[……]、恐ろしいほど強い意志をもっていたので、家族全員をバリーに引っ張って行くのに成功しました。姉は彫刻をしたいと思い、私には作家という天職があるように見えていました[……]。要するに、家族が二つに割れてしまったのです。父はヴァシーに残り、私たちの方はバリーに行き、モンパルナスに落ち着いたのです。私にとってこのことは、人生の大変動でした。なぜならば私の全生活は二つに引き裂かれてしまったからです²¹。」

カミーユが17歳、ポールが13歳のときのことです。

私がこれら二つの証言をこうして引用するのは、ポールの人生の始まりからすでに、カミーユがいかに力強さと意志を身につけていたかを、それがよく示しているからです。カミーユはポールの4歳年上の姉です。二人は幼年期から思春期にかけて、聖書物語、ギリシャ悲劇、偉大な叙事詩をむさぼり読むという趣味を共有していました。カミーユは、弟の精神と感受性を形成するのにまさしく貢献したのです。

彼ら二人とも早熟で、表現への意志——ひとりは彫刻において、もうひとりは文章を書くことにおいて——を意識しており（ただちに天才とは言わないでおきましょう）、それに身を捧げつくすことの必要性を早くから感じていたのです。

ポールとカミーユとのあいだで、思春期が終わるころには、仕事で前進しようとする互いの試みに対し、たえまない注意と認識が確立されることになります。友達づきあいの共有。彼らは二人とも、マラルメの火曜会³¹を頻繁に訪れます。とりわけオクターヴ・ミルボー、マルセル・シュウォップ、モーリス・ポトゥシェが、彼らの共通の友達です。二人がバリーで頻繁に訪れる知的で芸術的な社交界では、姉なしに弟を知ることも、『黄金の頭』 *Tête d'or* や『都城』 *la Ville* の作者である弟なしに姉を知ることもなかったのです。ロダン³²は、ポールが外交官試験に志願できるように、外務省に推薦の手紙を書き、ポールはそれに首席で合格することになります。弟と姉の生活は、その芸術的活動のごく初期にはたえず交差していました。相手の仕事に対する称賛の気持ちは、交際や手紙を通じて明らかに示されました。

そのことはとりわけ、合衆国のニューヨークで、ついでボストンで当時勤務していたポールに宛てたカミーユの手紙が示すとおりです。1893年12月の手紙です。この資料は貴重なものです。というのもカミーユが彫刻の計画について、それを裏付けるクロッキーとともに長々と論じているからです。「あなただけに私の見つけたものを教えてあげます。ぜったい他人に見せないでね。でもあなたは、自分の書いているものについてはぜんぜん話してくれないわね。執筆中の新しい本でもあるのかしら。何人もの友人が『黄金の頭』を買うつもりであると私に言いました。」それからあの有名な一文。「分かるでしょ、これはまったくロダン流のものではないのです。」

この幼年期、思春期、青年時代という時期を少し強調しておきましょう。というのは、二人の人生の最初の三分の一にわたる期間、ポールとカミーユのあいだの関係は、彼らの生活上の出来事を通して、また彼らの仕事を通して緊密なものとなるからです。ですがカミーユにとっては、

不幸が非常に早くそれにとって代わることになります。

ここで、カミーユとポールの個性がどのような点で似通っていたのかを示すために、しばらくのあいだ、年代順にお話するのを中断することにします。荒々しさ、重大な矛盾、例を見ない天賦の才、恐ろしいほどの脆さからなっている二つの個性。彼らは二人とも、それがもたらす結果をとことんまで体験することになります。一方は世界の中で、もう一方は世界の外で。彼らの作品を通して、また同時代人の証言を通して、さらには自分たち自身についての打ち明け話（それはごくまれですが）を通して、数多くの共通点があらわになります。

1. 最初から、早熟な天命は、その風景が生涯にわたって彼らの内面に消えずに残った場所、つまり幼年時代の土地にはっきりとあらわれていたのです。「わが故郷」*«Mon pays»*についてのポール・クロードルの文章は皆さんもご存じのことでしょう。『マリアへのお告げ』*l'Annonce faite à Marie*や、ほかの数多くの文章を引用する必要もないでしょう。そのなかには、彼がふるさとの雰囲気や『嵐が丘』*Wuthering Heights*で描かれている地方に比較しているものもあります。カミーユに関しては、モンドヴェルグの病院で書かれた一通の手紙があるのですが、それはヴィルヌーヴに戻って生活することができるよう求めるものです。それから、カミーユが自分の子供時代ゆかりの女性たち、つまり、自分たちの女中で森番の娘であるヴィクトワール・ブリュネ、老女エレヌ、ウージェヌ・プレ、マリア・パイエットについて示した人物描写もあります。また、二人の幼年時代および青年時代からすでに、父親ルイ＝プロスペル・クロードルはこの子供たちの天職を見通していたことを付け加えましょう。

2.-3. 二人ともに、生来非社会的で孤独でした。ポールいわく、「私の個人的な好みに加えて外的状況のせいで、私はいつも孤独な人間になってしまいます。そして冷笑的な率直さをもって告白させてもらえば、私は個人的に、グループ、チーム、仲間意識、皆が使う言葉をいつも嫌っているのです。」『真昼に分かつ』*Partage de midi*におけるメザ Mésa という登場人物を思い出しましょう。批評家でありジャーナリストであるアンリ・アスランは、孤独のうちにあるカミーユをしばしば訪問し、彼女を「街のすべての策略、すべての妥協、すべての罫に無知の女性」として描写しています。また、ロダンと別れた後の孤独な生活はしばしば描写されてきました。「彼女に関しては友人も交際関係も知られていなかった。」（アスラン）クロードルは1951年の見事な文章のなかで彼女を「白いブラウスに身を包んだ孤独な女性」として描いています。「厳しい風土、吹き荒れるひどい風」、長い散歩、ヴィルヌーヴの森のなかでの探索、あるいは『マリアへのお告げ』にあれほども出てきて、カミーユの彫刻の最初の試みにその奇妙な岩々が着想を与えたジェアン Géyn⁴⁾こそが、その非社会的な性質を形成し得たのです。

4. 二人に共通したもう一つの特徴は、傲慢さと謙虚さとの混じり合いです。カミーユはポールへの手紙で、「これはもうまったくロダン流のものではないのです」と書いていましたが、また同時に、批評家カルル・ボエスへの手紙のなかではこう言っていました。「それから私は大

衆の興味を惹き、そこにしかるべき結果を見出すことができないのではないかと、ひとりと思っています。」(1901)「彼女は、誰かが自分に関心をもちたいと思っているのを知って驚いた。大きな雑誌のなかで自分とその作品のことが話題にされるかもしれないと思ったら、かえって彼女を墮落させただろう。」(アスラン) いっぽうポール・クロードルは、マルセル・シュウォップへの手紙のなかでこう述べています。「しかし私は人生のなかで自分に満足のいく文は一文たりとも書くことができませんでした。生まれつきの不器用さや、忍耐力がなく鈍重な性質のため、私はけっして作家にはならないだろうと思いますし、自分がかかっている美の感情にもかかわらず、知られざる、野蛮な言語でつばめのようにさえずり続けなくてはならないだろうと思うのです。」また他方では、「多くの人々は傲慢ですが、私よりはるかに上手に、そのことを隠すべを知っています。」(『即興の回想録』)

5. 頑固さ、ねばり強さ、仕事の力強さ。ポールの巨大な作品群がその証拠です。かなりの数にのぼるその戯曲はしばしば書き直されました。カミーユに関して言えば、ジャーナリストであり、アトリエで彫刻の仕事に立ち合った鑄造職人ウージェーヌ・プロとともに彼女の称賛者のひとりであるアンリ・アスランは、彼女の力強さと熱心さを描いています。姉と弟の「双生児性」«gémellité»と私が呼びたいものを証拠立てるには、彼らの生活におけるさまざまな出来事や、行動をさらにあげることも可能です。
6. 苦しみに満ちた恋愛生活。しかしそれは彼らの靈感に滋養をあたえました。「もはやロダン流のものを作らないことになる」カミーユ⁵⁾。浄化の試み⁶⁾のなかで『真昼に分かつ』*Partage de Midi*と『繻子の靴』*le Soulier de satin*を書くポール。
7. 宗教的な生活に関しては、初期のころの不可知論、あるいは無関心があげられます。ポールは18歳のときに回心し、回心者としての最初の読書として、ある英国人の友人がカミーユに与えたプロテスタントの聖書を用いました。いくつかの証言が示すところでは、カミーユは精神病院へ収容されていた時期、教会に接近したとのことです。クロードルは、日記のなかでカミーユが自分で作ってモンドヴェルグから母親に送った数珠のことを語っています。
8. 心情面においては、波乱はあったものの、近親者に対して優しさや愛情を表現することができました。
9. 音楽に対する両面的な態度。彼らの芸術が音楽に対して優位にあること。ジュール・ルナールの『日記』は、カミーユが音楽を嫌っていたことを伝えています。けれども、彼女がドビュッシーを称賛していたという当時の証言や、彼女の作った『ワルツ』*la Valse*という彫刻がありますね。クロードルは、モンドールが引用しているマラルメ宛ての手紙のなかで、以下のよう書いています。「何を言っているのか自分では分からないこの狂女、つまり「音楽」を隣

人とすることは、今日の作家にとってあまりにも有害であったため、誰かが、「分節された言葉」«parole articulée»の名のもとに、音楽に対し、権威をもってその限界を定めるのを見ることは快いことです。」しかしながらまた、私たちはみな、彼がベートーヴェンを賛美していたこと、また、ワグナーをとにかく賛美していたという貴重な事実、そしてオネゲル⁷⁾とダリウス・ミヨー⁸⁾という二人の狂った作曲家に関する彼の仕事と友情を知っています。

10. 博物学の趣味は『即興の回想録』に見るとおりです。ポール・クロードルは、ルイ・ル・グラン高等中学校のある教師の授業を通して得られたこの好みについて語っています。「そしてこのマンジャン先生は、私の個人的な好みには何の考慮もせず、私の頭をテーブルにたたき付けるようにして、博物学にいやがおうでも興味をもたせようとしたと言えます。私は結局それにしがたい、今でもその好みをもちつづけているのです。」また私たちはカミーユがいかに関節解剖学を注意深く研究していたかも知っています。ポールは、彼女がいつも手元に置いていたサイの頭蓋骨のことを語ってくれます。カミーユの作品『骨をかじる雌犬』*Chienne rongeur un os*を見ると、彼女がどんなにすばらしい動物彫刻家になることもできただろうに、と思います。クロードルから引用しましょう。「姉は肉付けの技法を、自然観察にもとづいたひたむきな努力によってばかりではなく、数ヶ月にも及ぶ解剖学の研究と実際の解剖によっても獲得したのである。姉は長いあいだ、研究していたサイの頭蓋骨を手放そうとせず、スーツケースのように持ち歩いていた。」

11. 失敗や貧窮に対する恐れを二人は分かちもっていましたが、それはおそらく彼らのブルジョワの出自のせいでしょう。カミーユの金銭欲求は、両親の支援にもかかわらずけっして満たされることがありませんでした。もちろんこれは現実的な必要にかられてのことですが——彫刻はお金がかかるのです——おそらくはまた、たえない苦悩に結び付いたやや無秩序な問題でもありました。金満家ではなかったポールもまた、経済的心配にさいなまれていて、いろいろと非難されたものですが、じっさいポールには負担しなければならないたくさんのことがあったのです。ではここで締めくくりとして、彼らが共通してもっていた性格についてお話ししましょう。ポールは姉のもっていた残忍な揶揄の才能について語っています。いっぽうクロードルもまた著作のなかで、一種の残忍な審判を下していたことが知られています。そして今こそ、彼らの人生でいちばん長い部分であり、私の発表ではいちばん短い部分となっていることを述べておきましょう。まずクロードルの引用から始めます。「多少ものやわらかで夢想的であるにしろ、私は姉の気質をまさにもっているのです。もし神の恩寵がなかったならば、私の物語は姉と同じもの、あるいはもっとひどいものとなったことでしょう。」今日ポールに関してお話しできることはほとんどみな、カミーユの悲劇の上にうち立てられていると言えるでしょう。

流謫

流謫——ニューヨークとボストンでの合衆国副領事としての最初の赴任の日付1893年から、1935年のブリュッセルでの最後の任務を終えて退職に至るまで。

ポール・クローデルは（休暇の期間は除いて）ずっと外国で暮らしました。「旅人は、客のような顔をして自分の家に帰る。彼はあらゆるものに対して見知らぬ者である。また、あらゆるものが彼にとって無縁のものである。女中さん、私の旅行用マントはただかけておくだけで、持っていないでください。また出発しなければならないのだから。家族の食卓でこうして再び腰をかけているのは、うさんくさい、つかの間の客である〔……〕あなたがたのもてなしを受けたこの通りすがりの男の耳は、列車の轟音と潮騒に満ちている。彼は夢を見ている人間のように、自分がまだ足元に感じ、自分をまた連れ去るはずの深い動きに身を揺すられており、あなたがたが宿命的な波止場へと連れて行った人間とはもはや同一の人間ではない。別離は果たされた。彼が身を投じた流謫の生活が続いていく。」（『東方所観』 *Connaissance de l'Est*）またこう述べている。「外交官としてよりもむしろ巡礼者として、故郷の村と教会に後ろ髪を引かれながら、それでも新しい地平線につねに好奇心を抱いている。」

ポールの流謫とは中国、アメリカ、日本、ブラジル、そしてヨーロッパではデンマーク、イタリア、ベルギー、チェコスロヴァキアなど、世界中にわたる外国暮らしのことです。

カミーユの流謫とは、精神病施設へ収容されていた期間の1913年から1943年にわたる、この世界から隔離された生活のことです。

ここで1905年夏という日付を呼び起こしたいと思います。ポールとカミーユは一緒に南フランスの旅をしています。オルテスではフランシス・ジャムのところで、それからボルドーではもう一人の親友ガブリエル・フリゾーのところで過ごしています。ポールはそれから、ただし独りでロンドンに向かいます。今日私たちが知ることのできるのところでは、それが二人一緒に行なう最後の旅行となります。ポールはその当時ヴェッチ・ローズ Vetzch Rose、すなわち戯曲『真昼に分かつ』の女性登場人物イゼ Ysé のモデルである女性と別れた結果、深い絶望の時期を経験しています。『真昼に分かつ』は、まさにこの年に、いわば悪魔祓いをするために執筆した作品です。

カミーユはその靈感の限界に達し、1906年からはもはや何も創造しません。彼女の健康はすでに危うく、1913年という運命的な年に至るまで悪化して行くのみです。

ところで、ポールがすでに長い年月を留守にした後、二人が互いにそばで過ごしたこの時期からは何が生まれたのでしょうか。弟から姉への賛辞としては、カミーユについてのポールのすばらしい二つの文章のうちの一つ、『西洋』誌 *l'Occident* に発表され、それから1913年に『装飾芸術』誌 *l'Art décoratif* に再録された「彫像家カミーユ・クローデル」*«Camille Claudel statuaire»* があります。姉から弟への賛辞としては、今ここにもその複製がある⁹¹、37歳のときのポール・クローデルの胸像があります。それは、カミーユ最後の作品群のなかの一つとなるでしょう。

カミーユとポールは、それぞれ苦悩のなかにあって、互いに賛辞、つまり一種の予兆的な別れの挨拶を送ることによってしか解決法を見出せないまま、一緒に過ごしたこの期間をどのように生きたのだろうかとは私はしばしば考えます。ポールは翌年結婚し、中国へと再出発することにな

ります。カミーユは孤独へとますます奥深く入って行くでしょう。

物理的、地理的な別離は、弟と姉とを、けっしてわかれわかれにはしませんでした。カミーユは、ポールの人生の終わりに至るまで、その心と魂のうちに居続けるでしょう。そしてここでは、ポールの作品中におけるカミーユの痕跡のすべて、つまり彼の精神のなかにおける姉のつねに変わらない存在のあらゆるしるしを、日記、友人への手紙、戯曲の女性登場人物のなかから列挙することしかできません。『マリアへのお告げ』における二人の姉妹ヴィオレーヌ Violaine と マラ Mara がその一例です。クロードが自分の劇作品を通して何度も立ち戻ることになる犠牲というテーマは、彼自身の体験のみならず、彼が見たカミーユの生き方にも端を発しています。私の父ピエール・クロードは、その父親についての文章のなかで、このテーマはポールの認識＝共生«connaissance/co-naissance»の哲学に固有のものであり、この哲学に直接由来しているのだと述べています。しかし私は今、自分の主題からあまり遠いところへと離れていきたくはありません。

ヴィオレーヌは、自分の身を犠牲にすることで——カミーユがこの作品に生命を与えているのです——命を差し出すことができるようになるでしょう。クロードはこの戯曲をたえず書き直しました。つまり、場所や人物のみならずその主題も彼の内面に永遠に根を張ったままであったと言えるでしょう。

ここで私は、『都城』におけるラーラ Lâla という登場人物を取り上げ、この戯曲の結末における彼女の見事な独白を引用しましょう。「私は果たされ得ぬ約束に従います。私の恩寵はまさにそれに存するのです。私は存在しないものを哀惜しながら、存在するもののやさしさに付き従います。私は偽りの顔をもった真実に従います。私を愛する者は、真実と偽りとを区別しようとは思いません。私を理解する者は、永久に休息から、休息を見出したという考えから、解き放たれます。」

この引用文は、姉の悲劇に直面したクロードの苦悩を、じつに深く例証してくれているのですが、これ以上読み進めるのはやめましょう。クロードの劇における他の女性たちの背後にも、カミーユの複雑に入り組んだ存在を感じ取ることができます。『堅いパン』 *le Pain dur* における固い意志をもったリュミール Lumir, 『辱められた神父』 *le Père humilié* における盲目のパンセ Pensée のように、力強いのに、傷ついているこうした女性たちがたくさんいるではありませんか。

ポールの日記（1904年に始まっていることを思い出しておきましょう）においては、カミーユについて触れている最初の二つの言及のみを引用しましょう。まずは1909年の8月－9月のものです。「パリにて。狂人のカミーユ。剥ぎ取られて細長い切れ端となった壁紙。壊され、引き裂かれた肱掛椅子。ぞっとするような汚さ。彼女はひどいありさま、顔は汚れ、単調で金属的な声でひっきりなしにしゃべり続ける。」1913年2月－3月。「カミーユは十日の朝ヴィル＝エヴラルに収容された。私は今週ずっとひどく惨めだった。」この二つの文章を、姉の状態に立ち会ったときの狼狽をもう少しはっきりと示しているクロードの文章と比較しましょう。

「ヴェルレーヌ、ヴィリエ〔・ド・リラダン〕、他の落伍者たちの凶暴な顔付きは、私にとっては、いわく言い難い文字で、永遠に精神のなかに刻み込まれている。」——モンドールは、前

述の著作『より秘められたクロードル』のなかで、クロードルがヴィリエの才能を高く買っていたこと、ヴィリエとヴェルレーヌの悲惨な苦境を見てほとんどパニックに近い千々に乱れた感情に襲われたことについて語ってくれます。

1909年から1952年にいたるクロードルの日記には、すべて彼女の死より前のもののなのですが、56か所にもわたるカミーユへの言及があります。これらの記述は、極度の狼狽の表明、つまり、恐怖（英語のtremor「震え」という語の意味において）と同時に姉の運命についての悲しみに満ちた、一種の問題提起以外のものとしては読むことができません。「私は才能に満ちたあのすばらしい若い娘を思い出します。しかしなんと御しがたい激しい性格でした。」

1929年における彼の母親の死に際し、ポールは日記に次のように書いています。「母の人生は悲しみに満ちており、ほとんど喜びを知らなかった。なによりもまず謙虚で率直そのものであったあの母が、どうして姉カミーユと私のような二人の子供を持ったのであろうか。私はもう母に会えないのだ。」私はこの弔辞の数行のうちに、ポールが母親に最後の賛辞を送るために、あふれ出ようとする巨大な感情を抑制しているのが感じ取れますが、彼はいつもと同じように姉カミーユと自らを結びつけているのです。モンドヴェルグからカミーユが書く手紙は、母親ルイズに向かって、愛情や、もう会うことができないことを嘆く言葉を何度となく表明することになるでしょう。ポールにおいても、カミーユにおいても、悲しみや郷愁は母親との関係に関わってくるのです。

ポールは日記のカイエ8のなかに、1938年の日付があるカミーユの手紙を差しはさみました。カミーユはそこで次のように書いています。「実はここでは、むりやり私に彫刻をさせようとするのです。うまくいかないのがわかると、彼らは私にあらゆる種類の厄介事を押し付けます。それで私は逆にやる気が起きなくなるのです。」これは彼の日記のなかに保管されている唯一のカミーユの手紙でもあります。この数行を読んだときの弟の感情を想像するのは難しいことでしょうか。

やはりこの日記のなかにはカミーユに関する手紙二通の文章が見出されます。

ロダンが、作家であり、ジャーナリストであり、美術評論家であり、カミーユの熱心な称賛者であるオクターヴ・ミルボーに宛てた一通の手紙（マタラッソなる人物によってクロードルに伝えられたものです）。ロダンとカミーユは縁を切っています。「クロードル嬢が私と同じ日にあなたの家に行くことを承知するかどうかは分かりません。この二年間私たちは会っていませんし、彼女に手紙も書いていません。[……] それなのに、誰もがクロードル嬢は私のお気に入りであると信じている様子です。理解されない芸術家である彼女は、彫刻家である私の友人たち、加えて内閣で私を無力にさせた他の人々が自分に敵対していたことを誇りに思っていたのかもしれませんが。というのも、そこでは面識がないからです。親しい友よ、落胆するのはよしでしょう。彼女が最後には成功を収めることを確信しているのですから。しかしかわいそうな芸術家はそのとき、人生を知ってつらい気持ちに、今よりつらい気持ちになっていることでしょう。誠実に働く芸術家の自尊心の犠牲となって、あまりにも出世が遅かったことを嘆き、涙するでしょう。また、代わりに病気をもたらすこの闘いと、あまりにも遅い栄誉とですり減った自分の力を哀惜するこ

とでしょう。[……] あまりにも落ち込んだ私のこの手紙がクロードル嬢の目にはとまらないことを願います。」

1943年10月にポールがノートに書き写した二通目の手紙は、カミーユの死後モンドヴェルグの施設付き司祭から受け取ったものです。この手紙は全体を読むことにしましょう。深い理由もなくポールがこの手紙を書き写したはずはありません。「モンドヴェルグの施設付き司祭が、まさきにあなたにお悔やみの情を示しに行くでしょう。そしてあなたに、クロードル嬢が非常に手厚く看護されていたことを語るでしょう。あの方は好ましい性格で、育ちもよかったので、この境界でとても愛され、看護婦たちもとてもやさしく接してくれていました。あなたに手紙を書いている施設付き司祭は、しばしばあの方を訪れていましたが、いつも丁寧な仕方では迎え入れられていました。ご臨終の苦しみは、長くはありませんでした。臨終の秘蹟を受けたあと、安らかに息を引き取られました。それにあの方は時々、つねに立派な気位をもって聖体拝領にあずかっておられました。葬儀は非常に礼儀にかなったものでした。私はモンドヴェルグのような病院施設で宗教的儀式を執り行うことにいくらか気兼ねを覚えていましたが、一人の同僚、つまりモンファヴェの墓地まであの方に付き添ったアルザス人の司祭、それに施設の何人かの修道女と一緒にいてくれました。ミサをあげた司祭は長袍祭服、同僚の司祭はサープリス（祭服）を身に付けていました。大使殿、私はクロードル嬢に関してすばらしい思い出をもち続けていますし、故人に神のご加護があるようにとお祈りを捧げております。敬具。

モンファヴェ、モンドヴェルグ施設付き司祭、フェリックス・ブータン」

カミーユは長い流謫の果てに、信仰を取り戻したことで、弟のもとにたどり着いたのです。1951年、ポールはロダン美術館において、カミーユの作品の回顧展を企画し、カタログのために、姉についての二つ目のものとなる重要な文章¹⁰⁾を執筆します。それは次のような言葉で始まっています。

「私の小さなポール！私の声の響きのみが姉のところにまで届きました。今の瞬間よりもさらに遠いところから届いたのです。そしてもう一度——姉が答えているのか、それとも今度は私を呼んでいるのか、どちらでしょう——私は、遠く隔たったところからあの方の声を聞くことでしょう、私の小さなポール！と。もうおしまいです。」

彼はロダン美術館にカミーユの作品4点を寄贈しました。

『抱擁』*l'Abandon*（大理石）

『成熟の年齢』*l'Age mûr*（ブロンズ）

『成熟の年齢』*l'Age mûr*（石膏）

『クロト』*Clotho*（石膏）

カトリック詩人であり、アカデミー会員であり、大使であり、大家族の父親であるポールは、何よりもまず、そしてとりわけ、カミーユ・クロードルの弟だったのです。

（吉田城・津森圭一 訳）

注

- 1) アンリ・モンドール Henri Mondor (1886-1962) は外科医にして作家。医学書のほか、マラルメやヴァレリーにかんする著作がある。
- 2) Paul Claudel, *Mémoires improvisés, recueillis par Jean Amrouche*, Gallimard, Les Cahiers de la NRF, 2001, pp. 19-20. 文意が通じるように、ここでは原稿を補って訳出した。
- 3) 詩人ステファヌ・マラルメが火曜日ごとに開いていた文学サークル。
- 4) ジェアンは、実際にクロードルの故郷であるヴィルヌーヴ＝シュル＝フェール Villeneuve-sur-Fère の西に位置する岩場の通称である。大小さまざまな奇岩が巨人（ジェアン）の群のように白い砂丘の上にならんでいる。『マリアへのお告げ』では、病に冒された主人公ヴィオレーヌがこの岩場にうがたれた洞窟にこもる。ヴィオレーヌが妹マラの死児をよみがえらせる奇跡もここで生じる。
- 5) 師ロダンとの不倫関係は1900年代はじめまで続くが、それが破綻したのをきっかけとしてカミーユは精神の失調をきたし、創作も行き詰まることになった。
- 6) よく知られているように、ポール・クロードルはフランスから中国へと帰る船の上で出会った人妻と恋愛関係になるが、1904年には破局を迎えた。その思い出はこれらの戯曲に痕跡をとどめている。
- 7) アルチュール・オネゲル Arthur Honegger (1892-1955) はスイスの作曲家で「六人組」の一人。
- 8) ダリウス・ミヨー Darius Milhaud (1892-1974) はフランスの作曲家で「六人組」の一人。
- 9) 2003年3月15日、関西日仏学館でナンテ夫人らによって除幕式がおこなわれたクロードルのブロンズ像をさす。
- 10) 「姉カミーユ・クロードル」と題された文章。Paul Claudel, *Œuvres en prose*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1965, pp. 275-285.